

- [▶ 掲示板](#)
- [▶ 英語素材ダウンロード](#)  
(毎月更新)
- [▶ リンク](#)
- [▶ 記事一覧](#)
- [▶ アルクの教材紹介](#)
- [▶ ヘルプ](#)
- [▶ お問い合わせ](#)

**ログイン**

ユーザ名:

パスワード:

[新規登録](#)[パスワードを忘れたら](#)from [SPACE ALC: 英語 > 受験英語](#)

2010年10月22日(金) 20:31 JST

### アルク高校教材編集部レポートVol.44 ~ 東京都立八王子東高等学校 石崎陽一先生の授業 ~

このコーナーでは、アルク高校教材編集部が拝見したユニークな英語授業の取り組みや、参加したセミナー・学会の概要を紹介いたします。

去る9月25日、東京都立八王子東高等学校を訪問し、石崎陽一先生の授業を見学させていただきました。石崎先生は、さまざまな英語の勉強会に参加したり、ご自身で語学書・学習参考書などを研究したりしながら、少しでも生徒の英語力をアップさせようと、日々励んでいらっしゃる熱心な先生です。現任校でのさまざまな試行錯誤を糧に辿り着いた、現在の授業を見せていただきました。

#### 週3回の「リーディング」で英語力を効率的に高める

今回訪問した八王子東高校では、高3になると、全員必修の英語授業は「リーディング」と「ライティング」を合わせて週5時間となります。その一方で、理系の生徒については、理科と数学は合わせて18時間が必修となっています。つまり、他の科目の学習に気を取られがちな中、たった5時間で、効率良く英語力をアップさせなければならないのです。

現在、石崎先生が担当されている高3の「リーディング」は週3時間。何名かの先生でクラスごとに分担して同じ科目を担当しますが、進度や指導内容に大きな差異が出ないように、以下の3つを共通の約束事としているそうです。

入試問題などを抜粋して編集したオリジナルテキストを使用する。  
 テキストにある1つの長文を2時間の授業時間で終える。  
 長文読解は、大意把握に重点を置く。

しかし、この3つの条件に沿った授業であれば、授業の展開方法は、担当の先生に任されています。先生方は、それぞれが効果的と考える指導を自由に行いつつ、時折会議を開いて成功事例や失敗例などを共有して、授業をバージョンアップされているそうです。

なお、このオリジナルテキストを使い始めたのは2008年度から。毎年、高3の担任の先生が中心となって、その年のテキストを編集します。1つのテーマにつき2つくらいの長文が入っており、前に同じテーマを読んだ時に覚えた単語が後のユニットで役立つなど、先生方の工夫が凝らされたものになっています。

#### 1年目の試行錯誤

高3の「リーディング」を担当することになった1年目、石崎先生は、「1時間を使って長文の前半を丁寧に訳読し、2時間目に後半を訳読する」という授業を試みました。オリジナルテキストに掲載されている長文は、500~800語程度のかなり読み応えのあるものが多く、単語や構文も高度なものが含まれているため、しっかりと解説しなければ生徒が理解できないだろうと考えたのです。

しかし、実際に指導してみると、「1時間目に習った内容を生徒が覚えておらず、2時間目は復習から始めなければならないことも多い」といった問題点が浮かび上がってきました。しかも、学校行事等で授業がつぶれ、1時間目と2時間目の間が空いてしまうときはなおさら、1時間目の内容を生徒はほとんど忘れてしまいます。「せっかく丁寧に解説しても、生徒が忘れてしまい、定着しないのでは意味がない」と考えた石崎先生は、今年度は全く違ったやり方を試してみることにしました。

#### 「同じ英文を何度も読む」授業

石崎先生は、まず、他の先生方の成功事例を研究しました。同じ八王子東高校で、高2担当の先生方が、「漠然と読む やや詳しく理解 詳しく理解」のステップで教科書の「3度読み」をさせ、実力が上がったと聞くと、そのやり方を取り入れようと考えました。さらに、英語の先生向けの研修会に積極的に参加して勉強したり、灘中学・高等学校の木村達哉先生が主宰され、先生方自身で作る勉強会「英語教師塾」で学んだ他の先生方の授業も参考にしたりしながら、「同じ英文を何度も読む」授業を作り上げていきました。

そうして出来たのが今回拝見した高3「リーディング」の授業です。

その特長は以下の通り。

1時間目の授業と、2時間目の授業で、それぞれ1長文全体を扱う。  
ただし、**1時間目は、重要なポイントを取り出して精読を行う**  
のに対し、**2時間目は、同じ長文を自力で大意把握し、最後に要約する。**

先生が一方向的に訳を与える訳読ではなく、生徒自身が取り組む学習活動を授業の中心に据える。

今回拝見したのは、2時間目の「大意把握・要約」の授業でしたが、生徒は、自ら考え、英語を主体的に読み、答案をまとめる作業に取り組んでいました。

### 1時間の授業の流れ(大意把握・要約編)

「起立、気をつけ、礼!」

授業の掛け声が終るか否かというタイミングで先生から指示があり、「単語セルフチェックシート」を使った単語練習が始まりました。BGMに合わせ、最初は1語ずつ先生の読み上げに続いて発音練習、次にペアを作って問題を出し合い、最後はチェックシートを裏返しにし、先生が日本語訳や英単語をランダムに言うのに対して生徒が英単語や日本語訳をクイックレスポンスで返すなど、さまざまな活動が展開されました。生徒さんは授業の形式に慣れており、和気あいあいとした中にもテンポ良く授業が進んでいきます。これは毎時間10分程度行われる帯活動だそうです。

なお、この単語セルフチェックシートは、石崎先生のオリジナル。左から順番に、日本語訳 / 英単語 / 派生語 / 語源や入試頻出度などの豆知識 が記載されていて、ノートにも張りやすいサイズで作られています。特に工夫されているのは、「語源や入試頻出度などの豆知識」の部分。先生が、1つ1つ辞書や入試問題を当って、その単語の語源やどの大学の入試にどのような形式で出題されているか、などを調べていらっしゃいます。そのため、作成に時間がかかり、「生徒には人気が高いので、本当は早く渡したいのですが、1回前の授業で渡すのが精一杯になってしまう」そうです。

単語学習が終ると、前回の授業でやり残した精読用プリントの最後の問題を先生が解説し、その後いよいよメインの「大意把握・要約」へ。ここでプリントが2種類配布されます。1つは「要約演習用」と書かれたB4のプリント。前回、「精読プリント」を使って部分精読したのと同じ長文が、ヒントなしの白文で記載されており、右ページには、要約を考える際に使えるメモ欄があります。もう1つは「150字要約演習用」と書かれた150字の升目が入ったB5プリント。生徒はこのプリントに要約を書いて最後に提出します。

「始めてください。」先生の声が掛かると、生徒たちは一斉に長文を読み始めました。長文の横に各段落のまとめを書き込む生徒、いきなり「150字要約演習用」プリントに書き始める生徒、やり方はさまざまですが、いずれの生徒も、何度も何度も長文を参照しながら、少しずつ要約を完成させていきます。持ち時間は15分。よそ見をしたり、おしゃべりをするような生徒は一人もいません。誰もが一生懸命、英文に取り組んでいる様子が伝わってきました。

要約の後、先生が一旦答案を回収し、ランダムに生徒に再配布します。そして、先生が作成した「要約例」と「採点基準」が記載されたプリントが新たに配られ、それに従って生徒たちが交換採点をします。このように「他の生徒に自分の答案が見られる」というのも、「いいかげんな答案は出せない」と、要約をする際の緊張感につながっているのでしょう。また、「他者の答案を採点することで気づきが生まれて自らの理解も深まり、採点理由を相手に説明することで一人ひとりの持つリーダーシップを発揮させる機会にもなる」と石崎先生はおっしゃっていました。

### 現状に満足せず、さらなる授業改善に取り組む

八王子東高校は、「進学校」と言われる学校で、基本的にはまじめな生徒が多いそうです。しかし、生徒さんが授業に熱心に取り組んでいた理由は、必ずしも「進学校だから」「受験期だから」だけではありません。石崎先生のお話によれば、今回見学させていただいた授業形態に改めてから、「以前より生徒さんの学習意欲は高まった」そうです。「最終的に要約をする、ということが前提にあるので、精読の授業も真剣に聞くようになりました。また、何度も英文を読むことで定着度が上がったように思います」と石崎先生はおっしゃっていました。

それでも、ここで満足してしまわないのが石崎先生。先生は、「現状の授業法で生徒の取り組みは変わりましたが、一方で課題もあります」とおっしゃいます。例えば、「授業で長文の全体像をつかむ前に、ピンポイントで部分を取り出して精読をさせる」ということへの迷いもあるそうです。かと言って、1時間目と2時間目の役割を交代させて「大意把握 精読」とすると、大意把握の段階で生徒がつまづいてしまう……授業に手応えを感じながらも、新たな悩みも抱えている、と明かしてくださいました。

また、別に担当している高1の文法の授業でも、「教える内容が多すぎて、しっかりと定着させる時間が少ない」という悩みをお持ちだそうです。そういった悩みを解決するために、全国を飛び回り、英語の先生方と悩みを共有したり、さまざまな研究会に参加したりしていらっしゃるのです。

今回の取材では、授業見学とは別に、高校教育に対する先生の思いもお聞きする機会がありました。「公立高校の先生は、異動が避けて通れない。せっかく勤務校で良い指導法を編み出しても、『その先生が異動した後はその成果が継承されない』のでは意味がない。誰が教えても同じく効果が出る授業ができるように、特に公立高校では、『授業のシステム化』をしていく必要があるのではないか」。日々の授業改善に留まらず、常に生徒と学校全体、そして教える側の先生のことまで視野に入れている石崎先生のお考えが垣間見えたような気がしました。

石崎先生、長時間に渡り、授業を見学させていただいたり、お話を伺わせていただき、ありがとうございました。また、先生の今後のご活躍も、大変楽しみにしております。

[他のレポートを読む](#)

[石崎陽一先生のブログ「アーリーバードの収穫」](#)

最終更新日：2010年10月14日(木) 13:46 JST; 233 閲覧件数



[運営会社について](#) | [サイトポリシー](#) | [プライバシーポリシー](#) | [お問い合わせ](#)